

# 自由主義はなぜ失敗したのか

～民主主義の内なる敵～

BNPパリバ証券 経済調査本部長・チーフエコノミスト **河野 龍太郎**



河野 龍太郎氏

2016年の米国大統領選挙の際、トランプ1.0旋風を読み解く上で、当時、筆者が注目したのは、ツヴェタン・トドロフの著書『民主主義の内なる敵』だった。ブルガリア出身のフランスの哲学者は、民主主義そのものに自らを切り崩す要因が内包されていると語っていた。原書は2014年に出版されたが、翻訳者が後書きで述べていた通り、2016年の「トランプ現象」は、トドロフの著作を読んで戦略を練ったのではないかと思わせるほどだった。ただ、トドロフ氏は、民主主義は修復可能であるとも論じていた。

2024年の米国大統領選挙を読み解く上で、筆者が注目したのは、パトリック・J・デニーンの『リベラリズム（自由主義）はなぜ失敗したのか』である。市場原理の過剰な適用が不平等を拡大し、社会の分断を招いたという点で、両者は共通するが、デニーンは、保守、リベラルを問わず自由主義（リベラリズム）そのものの限界を強調し、自由主義からの脱却が必要と説いている。

自由の国アメリカにおいて、自由主義が否定されることなどあり得ない、と考える人は多いだろう。筆者もそう考えている。しかし、近年、米国の保守派思想において、パトリック・J・デニーンらのポスト・リベラリズムが台頭している。それだけではない。トランプ次期政権で副大統領となるJ・D・ヴァンスは、政治家としてではなく、統治哲学についても的確な言葉で語る事ができる知識人と見られているが、そのヴァンスが自らをポスト・リベラリズムと自認しているのである。

かつてトランプの側近だったスティーブン・バノンがヴァンスについて、「トランプ氏

---

のキリストに対する聖パウロである。すなわちトランプ氏自身よりトランプイズムの教義を広く拡散する熱心な改宗者」だと評していた。2016年のようにトランプイズムをもはやポピュリズムの枠内だけで語ることはできなくなっている。仮にトランプイズム革命がヴァンスによって完遂されるのであれば、どのような社会が目指されるのか。本稿では、2016年に筆者が執筆したトドロフの『民主主義の内なる敵』の書評に加筆・修正したものを簡単に振り返った上で、ポスト・リベラリズム派のデニーン『リベラリズム（自由主義）はなぜ失敗したのか』の論考を紹介する。

### 民主主義の内なる敵

まず、ツヴェタン・トドロフの『民主主義の内なる敵』について。元々、民主主義は、人民主権や自由主義、進歩主義など複数の要素から構成され、その構成要素が、時として互いに対立し、牽制することでバランスが取られ、上手く回る。20世紀終盤まで、民主主義には、ファシズムや共産主義という外敵が存在したが、それらとの戦いに勝利を取めた途端に、牽制し合っていた民主主義の構成要素が暴走を始めた。

ファシズムや共産主義は、19世紀後半から20世紀初頭に、民主主義の欠陥を補うと謳って出現したはずだった。当時の暴走する強欲資本主義を野放しにする民主主義では、経済格差等の深刻な問題を解決できないと考えられたのである。民主主義においてもグラジュアルな改革は必要であるにも拘らず、抽象的な理念を掲げ、人間の理性が限られているにも拘わらず、一気に社会の問題が解決できると進歩主義を過信したことが、まさに共産主義や全体主義という悲劇を生んだわけである。

行き過ぎた進歩主義は、ベルリンの壁の崩壊と共に廃れたと思われていたが、例えばアフガニスタンやイラクを欧米流の民主主義国家に改造させるというネオコンの思想もまた、行き過ぎた「進歩主義」に他ならなかった。また、移民排斥を強める西側諸国は、不寛容になり、国家主義的思想に傾いているようにも見え、懸念される。

2000年代末のグローバル金融危機という大きな犠牲を払った末に、ようやく人々は反省し始めたようにも見えるが、リバタリアン(新自由主義)は社会のあらゆる領域に経済的自由を持ち込もうと企図する点で、「自由主義」の行き過ぎであったと言える。国家があらゆる領域から退場すべきという考えもまた、行き過ぎた「進歩主義」の一形態に他ならない。

そして、ポピュリズムは文字通り「人民主権」の行き過ぎである。ポピュリストは、物事を単純化し、達成不可能な政策を簡単に人々に約束する。テレビやスマホの発達によって、目先の問題ばかりが注視され、社会内部の多様性は否定され、解決を要する長期的問題は完

---

全に無視される。失敗を糊塗するため、拡張財政も繰り返される。拡張財政による目眩ましが効かなくなった時、民主主義に失望した我々は、どのような選択を行うのだろうか。

原書は2014年に出版されたが、翻訳者が述べる通り、トランプ現象は、本書を読んで戦略を練ったのではないかと思わせるほどである。これまで日本の政治は極めて安定していたが、本書を読むと、2009-2012年の民主党政権のみならず、安倍晋三率いる自民党政権もポピュリズム的色彩を持つことが分かる。

自由主義、進歩主義、人民主権のバランス、すなわち「中庸の徳」が不可欠なのだが、回復は容易ではないだろう。今後10年の世界の政治潮流を読む上で必読である。

### トランプズムをポピュリズムの枠内だけで語るのは困難

以上が、8年前に執筆した『民主主義の内なる敵』の書評である。当時は、トドロフ氏の論考に当てはめ、筆者は、トランプズムを「人民主義」の行き過ぎであるポピュリズムと捉えていた。そのフレーバーは今でも否定はできないものの、もはやポピュリズムとして片づけるわけにはいかなくなっている。

また、共和党のこの8年間の変容について、興味深い点がある。トランプ以前の米国共和党は、①リバタリアン、②ネオコン、③宗教やコミュニティを重視する伝統的な保守主義、という三つの連合体だった。1980年のロナルド・レーガンの大統領選勝利の際に、この連合体は生まれた。しかし、トドロフが、行き過ぎた「自由主義」と呼んだリバタリアンも、行き過ぎた「進歩主義」と呼んだネオコンも、既に現在の共和党からは駆逐され、生き残ったのは「宗教やコミュニティを重視する伝統的な保守主義」であり、そこにトランプズムが加わったのが、現在の大きく変貌した共和党の姿である。

一方で、2024年の大統領選挙で敗退した民主党には、現在も外交人権重視派という形でネオコンの伝統が残り、また、クリントン、オバマ、バイデンの系譜である主流派のニューデモクラッツには、穏当な形のリバタリアンも残存する。アンチエスタブリッシュメント層の取り込みを重視するサンダースらラディカル左派路線の存在もあり、民主党が分裂を修復するのは容易ではない。

### 自由主義はなぜ失敗したのか

本題に入ろう。パトリック・J・デニーンは、リベラリズム(自由主義)そのものが大きな問題なのであり、自由主義を前提にした現在の社会秩序に代わるものを真剣に検討する必要があると論じている。ここでのリベラリズムとは、左派リベラルだけを指すのではなく、

---

アメリカ合衆国の建国の理念の一つであった自由主義そのものが誤りだったとしている。

なぜデニーンは、自由主義が失敗したというのか。元々、自由主義の論理は、個人を身分制社会や伝統的社会の束縛から解放することを目指してきた。ただ、人間は、本来、「自然や時間、土地」といった自分自身の力では変更できない大きな様々な条件に制約された存在であったはずである。人は、生まれる前から個人を超えて長く存在してきたものの中に生きてきた。それは、自由主義が「軛」であると内心、敵視してきた文化や伝統と呼ばれるものでもある。

自由主義の思想は、17世紀のトマス・ホブズやジョン・ロックらに源流を持つ。デニーンは、ホブズやロックにまで遡って、自由主義の再検討が必要だとしている。実は、筆者も、18世紀末に身分制を打破した市民革命の礎となったロックの個人主義的所有権の行き過ぎた解釈が強欲資本主義の元凶であり、そこまで踏み込んで個人主義的所有権の概念を再検討しなければ、市場至上主義を葬ることは難しいのではないかと、ここ数年、考え始めていたところだった。ただ、自由主義そのものが誤っていたという言説には正直、当惑している。

ホブズやロックは、人間社会の基本単位として、自由で平等な個人があり、政府の役割は、その基礎となる個人の生命や自由を守ることとしていた。ホブズは、「万人の万人に対する闘争」を終わらせ、個人の生命と自由を守るべく、社会契約が必要なのであって、法と秩序を維持するために、必要悪としてのリバイアサン（国家）を擁護した。ホブズがリバイアサンを容認したのは、絶対王政の擁護が主たる目的ではない。政府の正当性を考えたロックは、個人の生命や自由、財産権を守ることができない政府に対して、市民は自然権としての革命権を有すると考えた。ここまでの論考に対し、現代社会に住む我々は異論を持たないはずである。

ただ、こうしたロックらを始祖とする自由主義においては、個人を抽象的な自由と権利の担い手と捉え、個人は、伝統的な規範から解放され、自らの理性によって判断し、行動することが期待されていた。その結果、何が生じたのか。

デニーンによると、伝統的な社会組織から解放されたはずの個人は、結局のところ、市場と国家という、より大きな社会機構に自らの運命を委ねざるを得なくなった。自由主義を基礎とする個人主義は、一見すると国家から自由に見えた。しかし、現実には、国家とより強く結びついてしまった。これだけでは、分かりづらい。もう少し、説明しよう。

まず、伝統的社会が解体される過程において、文化や伝統は、あたかも費消される商品のように捉えられるようになった。一方、伝統的な社会から解放され、他者との結びつき

---

を失った個人は、根無し草となって、頼る「よすが」が存在しないため、結局、民主的権力や集権的国家に依存せざるを得ない。身近な近隣の住民と協力して、コミュニティの課題を自らの力で解決する習慣を失った個人は、もはや政府に頼るしか生活の用を果たす方法を知らない。

かつてアレクシス・ド・トクヴィルが『アメリカンデモクラシー』で論じた通りの姿となったのである。市場の領域を広げると、縮小するのは国家ではなく、コモنزやコミュニティなどの社会である。むしろ、市場の領域が広がり、コモنزやコミュニティなどの「社会」が益々脆弱になると、結局、国家の領域の拡大が要請される。この流れは、16-19世紀の囲い込み（エンクロージャー）以降も全く変わっておらず、現代の日本でも観察されることである。市場と国家の膨張で、コミュニティが失われていくのは、拙著『成長の臨界』で分析した通りである。

自由主義（リベラリズム）は、アンチ・カルチャーの側面も持つという。自由主義は、伝統的な社会や組織から解放するため、むしろ個人を無色透明な抽象的存在として扱ったと述べたが、自由主義が想定する世界においては、人間は自然と切り離され、過去にも束縛されない存在となり、さらに土地との結びつきも失われた。そもそも、自由主義はそれらを個人の自由な選択を阻むものだと見なしてきた。

こうした文化や伝統の喪失は、ある土地に根を張って、「今を生きる時間」だけでなく、過去、未来とつながっているという感覚を人々から奪ってしまったとデニーンは論じる。その結果、自分が死んだ後は、野となれ山となれといった具合に、次世代への責任を欠いた感覚が、環境破壊や未曾有の公的債務問題にもつながっているのである。そもそも、自由主義には、「自然の制約」はもはや制約に非ず、という思い上がった思想が組み込まれていたという。

### アトム化する個人

過去数十年、我々が目にしてきたのは、社会の分解が止めどもなく進行する状況である。コミュニティは失われ、家族も持たず、友人もいない状況に人々は陥りつつある。SNSを通じて誰ともでもつながることができるユートピアにいるはずだが、多くの人々は、自らの孤独を感じずにはいられないディストピアにいる。つい30年前、40年前には、閉鎖的な伝統社会から逃れて自由になりたいとばかり考えていたはずの現代人は、いつの間にか孤独な社会に迷い込んでいる。コミュニティや宗教を失い個人がアトム化していくことも、19世紀にトクヴィルが予言していた通りである。

---

デニーンは、民主主義の危機も、自由主義の失敗に起因するとしている。19世紀半ばにJ・S・ミルが『自由論』で確立した「他者危害の原則」の論考通り、他人に危害を加えない限りは、自由主義の追求は望ましいと、今も我々は考えている。自分が欲する通り、自分らしく生きるという人間至上主義論は極めて真っ当な主張のはずである。しかし、この考えは、近年、「個人の自由な選択」というレベルを通り越し、社会制度として受け入れるべき必要条件というところまで達しているとデニーンは批判する。

この結果、人工中絶や性的多様性について反対する人は、その逆の立場の人（目覚めたウォークな人々）からは、崇高な理念である自由主義を受け入れることができない人々であって、社会の正当な一員と見做すべきではない人々、といった誹りを受ける極端な風潮もなっている。「個人の自由な選択」が絶対視されるあまり、一種の権威主義に陥っていないかというわけである。左派リベラルの主張が行き過ぎたのは筆者も首肯するところである。

### 自由主義は豊かさの条件ではないのか

豊かになれるのは自由主義国家だけではないのか。現代社会を見れば、経済的繁栄の果実を享受する人は限られており、実際には、全く豊かになれず、困窮する人が増えている。米国では、過去30-40年あまり、低所得階層は、実質賃金が全く増えていない（いや、日本では、過去四半世紀、時間当たり生産性が3割も改善しているのに、平均的な実質賃金すら、全く増えていない！）。米国では、1980年代頃からそうした停滞が始まっていた。

1990年代頃であれば、「自由主義の下で、バランスを取った所得分配を目指す」という政治的な言説は有権者に対してまだ説得力をもっていたかもしれない。しかし、40年も低所得者層が全く豊かになれない状況が続くと、もはや自由主義の有用性を広く説得するのは政治的に困難であろう。

また、安い労働力を求めて生産拠点が海外にシフトし、ITデジタル革命で自動化が進み、中間的な賃金の仕事が失われて、高い賃金の仕事と低い賃金の仕事に二極化が進んだ。イノベーションやグローバリゼーションの恩恵は、文字通り、一部の人に集中している。こうした中、多くの人にとって我慢ならないのは、単に貧困に喘いでいるという自分たちの境遇の問題以上に、大きな格差が続いているという現実であり、一方でエスタブリッシュメントが自由主義を今も振りかざしている姿である。

### 自由の本当の意味

「リベラルアーツ」は、現在では、教養を意味する言葉である。本来の意味は、実は、人々

---

を自由にするための技術であった。古代ギリシャでは実益を目指す活動を「奴隷的学芸」と呼んでいた。一方、知ることそれ自体を目的とするような活動を「人間の自由な学芸」と呼び、個人がいかに自らの欲望をコントロールして、欲望を制御するかを教えていた。古代ギリシャにおいては、「自由」は人間が生まれながらに持つ能力ではなく、時間をかけて修養を積むことでようやく手にするものだった。この伝統は、長くキリスト教社会でも続いてきたし、日本を始め東アジアの国々ではつい最近まで、こうした修養の技法を教えていたはずである。

しかし、ロック以降の自由主義は、ひたすら個人の欲望の解放を推し進める一方で、それを制御するための技法を全く教えなくなってしまった。結果として、個人の欲望に歯止めがかからなくなり、決して人間は現状に満足することを知らず、常に欲求不満と不安を抱えて生きることになってしまったわけである。デニーンによれば、今我々に求められているのは、古典が教える自らの欲望を制御する技術を学ぶことである。古代ギリシャが教えた通り、欲望からの自由が、真の自由なのである。

### 新たな支配階級

デニーンは、現在の自由主義の果実を得ている人々にとって、「自然、時間（歴史的制約）、土地」といった制約は不要であろうと批判する。高い教育を受け、自由に動きまわることのできる「グローバルリスト」は、どこに行っても上手くやっけていける「エニウエア（Anywhere）族」である。しかし、先進国においても、多くの国民は、ある特定の場所に生まれ、同じ場所で成長し、生活を続ける「サムウエア（Somewhere）族」である。自由主義は、王政を打破し、貴族階級を葬ることに成功したが、結局、新たなグローバルリストやエニウエア族といった支配階級を作り出してしまったのである。

この点もトクヴィルが予言した通りの現象である。身分制が崩壊しても、経済力を持った新たな貴族が現れ、新たな身分制が生み出されただけだと懸念していた。かつての支配層は、領民に対して徳を施すことが義務とされていた。しかし、強欲資本主義下のエスタブリッシュメントは、自由主義の理念に従い、市場で決定される低い実質賃金を正当な対価として支払って終わり、で済ませられる。

デニーンの論考を中心に、ここまで論じたことが、欧米で観察されるエスタブリッシュメントとアンチエスタブリッシュメントの対立の根底にある現象である。そして、先の衆議院選挙において、アンチエスタブリッシュメント層が日本でも形成されたことが確認されたのではないか。

---

## トランプイズムの帰結

もし、トランプイズムが、デニーンが論じるように自由主義の再検討を迫るものであれば、それはグローバル経済にも相当に大きなインパクトを持つであろう。修正資本主義の始祖となったフランクリン・D・ルーズベルト級のショックというべきかもしれない。振り返れば、1980年代初頭に大平正芳首相は、西欧文明は既に行き詰まっていると喝破していた。デニーンの問題意識から、さほど遠くはなかったし、当時の日本は、デニーンに掲げるあるべき姿からも、さほど遠くはなかったようにも思われる。それを目的地として掲げるのなら、日本にいる我々は、多少は有利な立場にいるのだろうか。それとも、この50年近くで、欧米とさほど変わらない状況となったのだろうか。

デニーンがゴールとして目指すのは、古代ギリシャの「ポリスの生活」である。というのと、時代錯誤も甚だしいと考える人も多いただろうが、実際に参照するのは再びトクヴィルの論考である。19世紀前半のアメリカのタウンシップと呼ばれるコミュニティにおいて、人々は近隣住民と共に地域の問題を解決し、自制と自律の習慣を身に着けた。そのことは、人々の政治的判断力の養成にもつながる。その延長線上に、地域との結びつきを取り戻し、世代を超えた知恵や文化の継承と創出に参加していくという姿が『アメリカンデモクラシー』には描かれていた。既にコミュニティを失い、現代の自由主義の議論に慣れ切った私たちにとっては、時代錯誤が甚だしいように見えるが、それは、単に筆者の想像力が欠如しているからであろうか。

高い教育を受けたグローバリストが推進したグローバリゼーションや移民政策によって、大きなダメージを受けた低中所得の人々を復活させるというのが、トランプイズムのレトリックだった。ただ、ヒト、モノ、カネのグローバリゼーションを推進する政策の中でも、特に大きな問題だったのは、行き過ぎた資本の自由化だと筆者は長く考えてきた。

しかし、8年前も同様の感想を持ったのだが、「ヒト、モノ」の移動への規制は今回も明確に謳われている一方で、カネについては、財務長官にウォール街の大物が据えられ、むしろ金融規制の緩和が検討されているという。モノやヒトのグローバリゼーションを巻き戻すとしつつも、金融資本だけは野に放つということになると、グローバル資本市場を益々カジノ化させることにはならないだろうか。或いは、一番厄介な問題は、ヴェアンスの時代になって最後に勝負に出るということだろうか。 ▮

### 【参考文献】

・会田弘継『それでもなぜ、トランプは支持されるのか アメリカ地殻変動の思想史』東洋経済新報社 2024年

- 
- ・河野龍太郎『ブックレビュー：民主主義の内なる敵 世界の政治潮流を読むうえでの必読書』週刊東洋経済 2016年11月5日号
  - ・河野龍太郎『コラム：ポピュリズムはなぜ世界を席卷するのか』ロイター 2016年12月21日
  - ・河野龍太郎『成長の臨界 飽和資本主義はどこへ向かうのか』慶應義塾大学出版会 2022年
  - ・ジョエル・コトキン、寺下滝郎訳『新しい封建制がやってくる グローバル中流階級への警告』東洋経済新報社 2023年
  - ・ジョン・ロック、加藤節訳『統治二論』岩波書店 2007年
  - ・ジョン・スチュアート・ミル、中山元訳『功利主義』日経BP 2023年
  - ・ジョン・スチュアート・ミル、山岡洋一訳『自由論』日経BP 2011年
  - ・田中浩『ホップズ リヴァイアサンの哲学者』岩波書店 2016年
  - ・ツヴェタン・トドロフ、大谷尚文訳『民主主義の内なる敵』みすず書房 2016年
  - ・トクヴィル、松本礼二訳『アメリカのデモクラシー（第1巻 上・下）（第2巻 上・下）』岩波書店 2005年、2008年
  - ・富永茂樹『トクヴィル 現代へのまなざし』岩波書店 2010年
  - ・パトリック・J・デニーン、角敦子訳『リベラリズムはなぜ失敗したのか』原書房 2019年
  - ・パトリック・デニーン『(インタビュー) 自由主義の失敗』朝日新聞 2019年9月19日
  - ・マイケル・リンド、施光恒監訳、寺下滝郎訳『新しい階級闘争 大都市エリートから民主主義を守る』東洋経済新報社 2022年
  - ・ヨラム・ハズニー、施光恒解説、庭田よう子訳『ナショナリズムの美德』東洋経済新報社 2021年